

の営みの母体も祈りにある。これが震災後の、命の回復を齎す力になり得るとした。また、物質とモノとの錯綜また用語の使い分けへの留意を促した。

津城寛文氏からの、我々は専ら翻訳語でものを考えるが、古語と翻訳語との中間辺りで語るのがよいとの感想があった。實川は、現代思想等の誤訳・悪訳がむしろ防波堤となり我々の文化を守っていると、翻訳(語)の再評価を示唆した。また津城氏は、人を傷つけない最低限の倫理が宗教者・研究者に課されないかと問い、杉岡を交えた談義となった。

西尾秀生氏からの問いを受け、杉岡は、ジャイナ教と仏教では、ジーヴァ観と識主体の教義に異なりがあると述べた。また長谷千代子氏から、靈魂は、物質と同等に並べるべきでなく、場の中に生ずる特別な係わりのことではないか、ある文脈の中での出会うことが、別の広がりを持つ場を作り出すとの示唆を戴いた。

寺尾寿芳氏からは、物質と靈魂の分割はギリシヤ的発想でありヘブライでは分けられない、キリスト教批判は専らギリシヤ的なものに向けられるが、ヘブライ世界については批判以前に理解が成されておらず、幅広いキリスト教理解が求められるとの教示を戴いた。

発災後、未体験の環境に、わたくしたちの生老病死は既に包み込まれている。自然界の循環に新たな物質が混じり佐須良ひ巡りはじめた。これらが、早晚生じるべき科学者間のパラダイムシフトを超え、集合(意識)概念の突然変異を齎すこととなるかもしれない。

公共空間における宗教的ケアのあり方

——「臨床宗教師」の可能性——

代表者・司会 高橋 原

コメンテータ 鈴木岩弓

ケアにおける宗教性再考

高橋 原

東日本震災以来、悲嘆を抱える人々の心のケアにおける宗教者の存在意義が再評価されてきている。在宅緩和ケアを専門とする岡部健医師は、死の問題に直面した人々に対して神仏などの超越的存在や、死後の魂の救済などに踏み込んだ心のケアのために、医者とともに現場に入る公共性を備えた宗教的専門職が必要であると提言している。本発表では、事例を参照しながら、宗教者が公共空間で行なう心のケアにまつわる諸問題を考察する。

宗教者が行なう心のケアを考える時に、「宗教的ケア」と「スピリチュアルケア」との区別が有効である。前者は宗教者が特定宗教の方法に従って提供するもので、予め答えが用意されている。ケア対象者がケア提供者の宗教の価値観を受入れることよって成立する。一方、後者はケア提供者(宗教者とは限らない)がケア対象者の価値観を受入れることよって成立し、対象者の心の動きへの寄り添いと自発的な気づきが重視される。

スピリチュアルケアが人間の健康にとって不可欠なものとし

て位置づけるスピリチュアリティとは、超越者とのつながりの感覚、自己の全体性が回復される感覚、生命の充実感、人生の意味などを意味し、「宗教性」と重なり合う概念であるが、特定の伝統や文化の文脈、組織や教義、価値観などに拘束されないこと、自発的にあらわれることが強調される。

一方、宗教者が提供するものである宗教的ケアは、儀式、読経、祈り、神仏などの超越的観念、死後世界や魂の観念、それらを指示する語彙の使用、宗教的物品の使用、宗教的衣装の着用などによって行われる。これは予め特定の宗教伝統の中で確立されてきた方法によって最も効率のよい心のケアを行なおうとするものであると言えるが、必ずしもケア対象者の自発的な心の動きや感情の発露を優先しないという側面もあり、その宗教の価値観にコミットしない者にとっては的外れであったり、抑圧的に働き得るので、公共空間には馴染みにくい性質がある。一対多でも行ないやすいことや、働きかけの対象を心に特化しないことから、感情表出を求めたり、内省を促したりしないので「心のケア」を受けるという心理的ハードルが少ないことも特徴である。宗教的ケアは対象者のケアのニーズに依じて、それに対処するために有効な方法として宗教的資源を利用するという点で、いわゆる布教につながるような一般の宗教的行為と区別される。

被災地等での宗教的ケアのいくつかの事例から見るとれるのは、悲嘆の表出とその受容、安心、呪術的効力、死者のケア(成仏)、見えない領域(死後世界、神仏、霊魂等)の承認とその対処方法等への期待である。新たに宗教的ケアを行なう専門

職の可能性を考えなくとも、こうした宗教的ニーズに対して宗教者がケアする体制は既に出来上がっているのではないか、あるいは、宗教者が本来の役割を果たせば十分なのではないか。そのような見解もあると思われるが、本発表で見た事例においては、自宗派の流儀で自宗派の信徒に対応していれば済むという構造にはなっていない。他の信仰を持つ人、「無信仰」の人を対象として宗教者がどのように心のケアを行ない得るかということが課題である。

宗教的ケアは、宗教者側の枠組みを前提として、提供者側に能动性がある関わり方となりやすいので、対象者の側のニーズを受け止め損なう恐れがある。力強い信仰で人々を導くのも宗教者の一つの理想であるが、それは人々のニーズに寄り添うケアの思想とは馴染まない。被災地の宗教的ニーズを踏まえると「宗教者が足りない」ということが一つであるが、宗教者の公共的役割という観点からは「宗教者」では足りないと言えないのではないか。そこに宗教的ケアを行なう専門職の可能性を考える余地が生ずるのである。

米国の病院チャプレンにみる公共空間での宗教的ケアの在り方

小西 達也

本発表は、発表者自身の実体験に基づき、米国の病院チャプレンによるケアの在り方について考察を加え、公共空間における宗教的ケアおよびその提供者である臨床宗教師に求められる要件を明らかにすることを目的とする。

チャプレンは、主としていわゆる傾聴やカウンセリングの形